

姫路市

# 大釜向山遺跡

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXXII—

平成13年2月

兵庫県教育委員会

姫路市

おお がま むかい やま い せき

# 大釜向山遺跡

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXXII—

平成13年2月

兵庫県教育委員会

## 例　言

1. 本書は、姫路市飾東町大釜新字亀甲山に所在する大釜向山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、山陽自動車道建設事業に関連するもので、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、平成5年度に兵庫県教育委員会が実施したものである。
3. 出土品整理作業は、平成12年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
4. 遺物写真撮影は、篠谷口フォトに委託して実施した。
5. 本書の執筆は、本文目次に記したとおり分担し、編集は池田悦子、今村聰美らの補助をえて長濱誠司が行った。
6. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
7. 現地調査および整理作業の際には、地元の方々をはじめ、関係各機関の御協力をいただいた。感謝の意を表する。

## 凡　例

1. 本書で示す標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を基とする。方位は座標北を指し、平面図に示した座標値は、平面直角座標V系原点からの距離である（単位はkm）。
2. 遺物には通し番号を付けている。ただし石製品、金属製品には、数字の前にそれぞれSとMをつけて、土器と区別している。また、遺物の番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
3. 土器の断面は、土器器を黒塗りとした。
4. 土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』1992年版を使用した。
5. 本書で使用した地図は以下のとおりである。

第3図 姫路市発行 1/2,500都市計画図 『大釜』

第4図 国土地理院発行 1/25,000地形図  
『笠原』 平成9年12月発行  
『加古川』 平成8年8月発行

## 本文目次

第1章 遺跡の位置と環境 .....	1
第1節 遺跡の位置 .....	(甲斐昭光) 1
第2節 遺跡の歴史的環境 .....	(長濱誠司) 2
第2章 調査の経過 .....	4
第1節 調査に至る経緯 .....	(甲斐) 4
第2節 確認調査の経過と体制 .....	(仁尾一人) 4
1. 調査の経緯	
2. 調査体制	
3. 調査の結果	
第3節 全面調査の経過と体制 .....	(甲斐) 6
1. 概略	
2. 全面調査の経過	
第4節 整理作業の経過と体制 .....	7
第3章 調査の結果 .....	11
第1節 調査の概要 .....	(甲斐) 11
1. 調査区の位置	
2. 遺構の名称	
第2節 遺構 .....	(甲斐) 11
1. 基壇	
2. 平坦面	
3. 塚状隆起	
4. その他の遺構	
第3節 遺物 .....	20
1. 出土状況 .....	(甲斐) 20
2. 土器 .....	(長濱) 20
3. 石器 .....	(長濱) 22
4. 鉄器 .....	(岡本一秀) 22
第4章 遺跡の検討 .....	24
第1節 遺物 .....	(長濱) 24
第2節 遺構 .....	(甲斐) 24
1. 検出遺構の種類と時期	
2. 基壇・平坦面の特徴	
3. 基壇・平坦面の性格について	

## 挿図目次

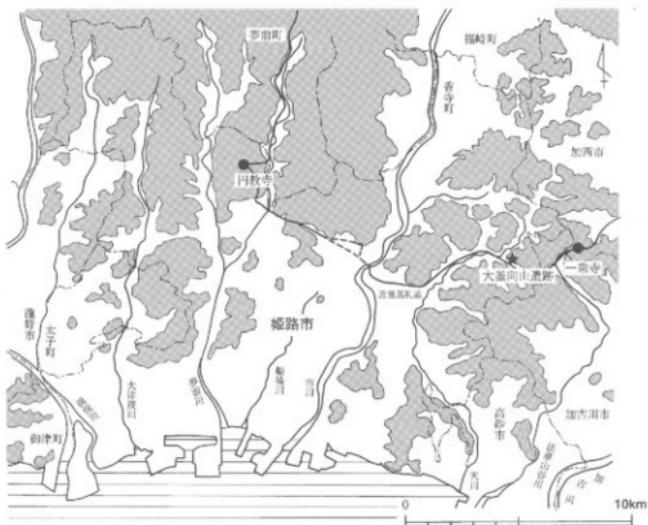
第1図 遺跡の位置 (1) .....	iv
第2図 遺跡の位置 (2) .....	iv
第3図 遺跡の位置 (3) .....	1
第4図 周辺の遺跡 .....	3
第5図 確認調査区配置図 .....	5
第6図 調査前の地形 .....	8
第7図 遺構全体図 .....	9
第8図 旧地形と基壇築造の関係 .....	10
第9図 基壇と平坦面 .....	12
第10図 土層堆積状況 .....	13
第11図 基壇石列平面図 .....	14
第12図 基壇石列立面図 .....	15
第13図 平坦面南端の石列 .....	17
第14図 塚状隆起 .....	18
第15図 土坑1・2 .....	19
第16図 出土土器 .....	21
第17図 出土鉄器・石器 .....	23

## 写真図版目次

- 図版1 遺跡の遠景  
　　上空から見た遺跡  
　　遠景
- 図版2 遺跡の全景 (1)  
　　上空から見た遺跡
- 図版3 遺跡の全景 (2)  
　　調査前の状況  
　　基壇・平坦面の全景(1)
- 図版4 遺跡の全景 (3)  
　　基壇・平坦面の全景(2)  
　　基壇・平坦面の全景(3)
- 図版5 基 壇  
　　基壇の全景  
　　石列検出状況  
　　石列の近景
- 図版6 積 石  
　　礎石検出状況  
　　礎石と鉄釘検出状況
- 図版7 盛 土  
　　基壇への盛土  
　　基壇・平坦面への盛土
- 図版8 塚状隆起  
　　塚状隆起全景  
　　塚状隆起盛土下層の集石
- 図版9 土 坑  
　　土坑1・2全景  
　　土坑1土層断面  
　　土坑2土層断面
- 図版10 遺 物  
　　出土土器
- 図版11 遺 物  
　　出土土器・鉄器・石器



第1図 遺跡の位置(1)



第2図 遺跡の位置(2)

# 第1章 遺跡の位置と環境

## 第1節 遺跡の位置

姫路市 大釜向山遺跡の所在する姫路市は、兵庫県南西部、播磨平野のほぼ中央に位置する。

姫路市の面積は274.26km<sup>2</sup>を測り、東は高砂市、加古川市、加西市と、北は神崎郡福崎町、同郡香寺町、飾磨郡夢前町、宍粟郡安富町と、西は揖保郡新宮町、龍野市、揖保郡太子町、同郡御津町と各々境を接している。南方は播磨灘に面し、海上には飾磨郡家島町がある。

市域のはば中央を流れる市川下流域に市街地が形成され、古くは播磨国府が、近世に入っては姫路城が築かれている。このように姫路市は、地理的にも行政的にも古くから播磨地域の中心であり、東西交通の要衝としての地位は今日も搖るいでいない。人口は約477,275人（平成11年1月1日現在の推計）であり、平成8年4月には1次指定都市として中核市に移行した。

地 形 市域には、東から順に、天川、市川、船場川、夢前川、大津茂川、揖保川が南流し、播磨灘に至る。これら河川の形成した沖積平野である姫路平野が市域の大部分を占めるが、西から北西部、東部には山地が多い（第1図）。

遺跡の位置 大釜向山遺跡は、姫路市の北東端に位置する。市域の東端を流れ、瀬戸内海に注ぐ天川の上流域、その支流の雜郷（ぞうごう）川右岸の山裾に位置する。天川上流域は狭い谷底平野（通称天川谷）となっているが、雜郷川流域は天川谷から東へのびる谷底平野であり、



南北両側を標高200m以上の急峻な山地に挟まれている（第3図、図版1上）。

現在、南側の山裾を走る道路沿いに大釜集落（平成9年9月30日現在45戸、人口206人）、大釜新集落（同18戸、人口57人）が位置している。

大釜向山遺跡は、これら集落と雜郷川を挟んだ反対側、谷底平野の北端の山裾に立地する。

第3図 遺跡の位置（3）

## 第2節 遺跡の歴史的環境

- 谷内村 大釜向山遺跡の所在する天川谷は、近代に入って谷内村と呼ばれた。集落の多くは「新」を冠し、近世に周辺地域の有力者により、開発されたと伝承されている。なお、近世において、天川右岸は篠東郡、左岸は印南郡に属していた。谷内村の中心である八重畑、小原の集落は丹波道沿いに位置し、成立は少なくとも中世まではさかのほる。小原は康正4年（1455年）の「山名宗全判物」に村名がみられ、「建武四年」銘の五輪塔<sup>10</sup>がある。
- 丹波道 谷内村は東西に丹波道がはしる。丹波道は律令期には姫路に所在した播磨国府から篠山盆地を経て亀岡盆地の丹波国府に至る、国府間を結ぶ道であることが指摘されている。中世においては源平争乱や、南北朝のおり、軍勢が移動に用いたことが文献に記されている。平安時代に起こった西国三十三所巡礼は近世に入ると、民衆の間で流行する。丹波道は播磨清水寺から一乗寺を経て円教寺に至る巡礼道として賑わいをみせる。近代以降は、軍用道路の性格が強かったが、現在は国道372号線として整備されている。1995年に発生した阪神・淡路大震災時には麻痺した阪神間の迂回路として機能し、古代以降の重要度が失われていないことを証明した。
- 古墳 この旧谷内村では周知の遺跡は極めて少なく、現在、弥生時代以前の遺跡は確認されていない。遺跡が確認されるのは古墳時代後期に入ってからである。平野部から天川谷の入り口付近に立地する篠東古墳群<sup>(3)</sup>は3基の横穴式石室墳からなり、1号墳は石室の平面形がT字形を呈する。谷内村ではこの他に古墳はみられない。周辺を見渡しても農富町の塩瀬古墳群<sup>(8)</sup>、奥ノ塙内古墳<sup>(9)</sup>、加西市の猫尾北山古墳<sup>(10)</sup>と後期古墳が少量あるのみである。
- 生産遺跡 篠東町周辺では古墳時代後期から須恵器生産が開始される。この地域の窯跡群は篠東窯跡群と総称される。塙崎1・3号窯<sup>(4)</sup>で生産された須恵器は篠東2号墳に供給されたとの指摘もある。その後も奈良時代の塙崎2号窯<sup>(4)</sup>、平安時代中期の八重畑窯跡群<sup>(5)</sup>、平安時代末～鎌倉時代初頭の蘿野窯跡群<sup>(9)</sup>と継続して操業している。また、大釜向山遺跡の東方には札馬窯跡群や中谷窯跡群<sup>(10)</sup>などを包括する志方窯跡群がある。志方窯跡群は奈良・平安時代の間存続し、平城京などに須恵器を供給していた。
- 宗教遺跡 播磨は早くから仏教を受容した地域であり、加古川・加西市周辺は多くの古代寺院がつくられる。天川源流域に所在する古法華山<sup>(11)</sup>は、現在小堂があるだけだが、奈良時代前期の石製三尊仏が残されている。周辺では奈良・平安時代の遺物が採集されていることから、寺院など宗教施設があった可能性がある。また、遺跡の詳細は不明であるが、大釜集落南東の大藤山山頂には平安時代の信仰遺跡<sup>(12)</sup>がある。
- 一乗寺<sup>(13)</sup>は法道仙人開基の伝承をもつ天台寺院である。西国三十三所巡礼二十六番札所として信仰を集めている。一乗寺の初見は応保元年（1161年）であるが、現代の伽藍周辺には多数の造成面があり、平安時代以前の遺物も採集されていることから、伽藍が整備される前にもらかの宗教施設があったと思われる。一乗寺は元和元年（1617年）に本堂などが焼失している。姫路城主多忠政は本堂再建に着手し、寛永5年（1628年）に本堂を再建している。大釜瓦窯<sup>(2)</sup>は近世の瓦製作跡であるが、出土瓦に一乗寺本堂瓦と同一の刻印をもつものがあることから、本堂再建時の瓦生産を行ったと考えられる。

## 参考文献

- 『角川日本地名大辞典』編纂委員会編 1988『角川日本地名大辞典28兵庫県』角川書店  
平凡社地方資料センター編 1999『兵庫県の地名II』日本歴史地名大系29II 平凡社  
足利健亮 1991「歴史地理学からみた巡礼道」『歴史の道調査報告第1集西国三十三所巡礼道』兵庫県教育委員会  
兵庫県教育委員会 1994『飾東2号墳』  
兵庫県教育委員会 1999『塩淵3号墳』  
加西市教育委員会 1997『加西市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』  
加古川市教育委員会 1994『加古川市遺跡分布地図第2版』  
永井信弘 1999『地方窯成立の一側面 食器奉仕と須恵器生産』『ひょうご考古』5号



第4図 周辺の遺跡

1. 大釜向山遺跡 2. 大釜瓦窯跡 3. 鈎東古墳群 4. 塩崎窯跡群 5. 八重畠窯跡群 6. 八重畠散布地  
7. 岩屋大池窯跡群 8. 塩淵古墳群 9. 細野窯跡 10. 奥の垣内古墳 11. 古法草散布地 12. 三口北山古墳  
13. 一乗寺坊跡・散布地 14. 中谷窯跡群 15. 大蘇山遺跡 16. 「建武四年」銘五輪塔

## 第2章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

山陽自動車道(高速自動車国道 山陽自動車道吹田山口線)は、大阪府吹田市を起点とし、瀬戸内沿岸の諸都市を結びながら山口県山口市に至る総延長約434kmの高速道路である。このうち三木・小野インターチェンジ(三木市鳥町)～山陽姫路東インターチェンジ(姫路市飾東町)間は、第10次施工区間として昭和63年に路線が発表された。平成9年12月に供用が開始され、これによって神戸ジャンクションから山口ジャンクション間が全線開通したことになった。

事業区域内の埋蔵文化財附蔵地の取り扱いについては、路線発表後、事業者である日本道路公団大阪建設局と兵庫県教育委員会で協議を重ねてきた。この大塗向山遺跡も、平成元年5月の分布調査(遺跡調査番号 890121)によって周知された遺跡であり、遺跡の内容に関する資料を得るために、平成5年1・2月に確認調査を行った。

### 第2節 確認調査の経過と体制(遺跡調査番号 920313・920314)

#### 1. 調査の経緯

平成元年度に実施された山陽自動車道(三木～姫路)建設事業に伴う分布調査では、姫路市飾東町大塗向山国有林において、加工された石材が散布する地点と2つの古墳状隆起が近接して発見された。前者は山陽自動車道(三木～姫路) No44地点(遺跡調査番号920313 以下、No44地点)、後者は山陽自動車道(三木～姫路) No45・46地点(遺跡調査番号920314 以下、No45・46地点)とそれぞれ仮称され、平成4年10月から平成5年3月にかけて、加古川市上荘町から姫路市飾東町山崎に至る区間の15ヵ所の地点とともに確認調査を実施した。

#### 2. 調査体制

日本道路公団大阪建設局との委託契約によって、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、以下の体制で調査を実施した。

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 内田隆義

副所長 駒井 功(事務担当)

三木正則(技術担当)

総務課 課長 田中豊英/主査 石井 守

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第2班 調査専門員 西口和彦

主査 森内秀造/臨時の任用職員 仁尾一人

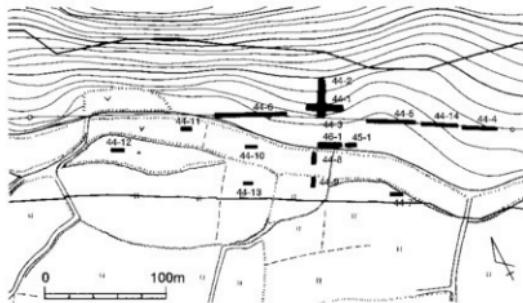
### 3. 調査の結果

調査の方法 No44地点、No45・46地点とも地形などを考慮して幅1mまたは2m、長さ5~20mのトレンチを設定した。掘削はすべて人力で行い、精査し、遺構の有無を確認した。トレンチごとに断面を写真・図面に記録した。調査終了後、トレンチは遺構保護のため、埋戻しを行った。

No44地点 調査は、平成5年1月12・13日に行った。当初トレンチを十字に3本設定(44-1~3)した。その結果、トレンチ内で東西方向約10m、南北方向約8mを割る基壇状の遺構を検出した。また、その周辺から平安時代の土器が多く出土した。このため、検出した遺構がさらに周辺に広がっている可能性が考えられたため、日本道路公团と協議を行い、平成5年2月17~25日にかけて、基壇状遺構の東西両側および、南側の水田に新たにトレンチを11本追加設定(44-4~14)し、遺構の広がりを確認する調査を行った。調査の結果、基壇状の遺構から出土した平安時代の遺物と同時期の遺物がおよそ20m東の44-5トレンチから出土したが、西側および南側のトレンチでは、遺構は確認されず、遺物も出土しなかった。

No45・46地点 No44地点のおよそ10m南側に位置する。2つの古墳状隆起が確認されていた。調査は、平成5年1月12・13日の両日、2つの古墳状隆起にそれぞれのマウンドを半裁するようにトレンチを設定(45-1、46-1)し、行った。調査の結果、トレンチ内からは、No44地点と同じ平安時代の遺物が出土したが、遺構は確認されなかった。古墳状隆起は古墳ではないことが判明したが、No44地点検出の基壇状遺構に関連するものと推定した。

確認調査では以上の成果を得たが、これに基づく協議の結果、平成5年度に44地点を中心にして全面調査を実施することになった。



第5図 確認調査区配置図

## 第3節 全面調査の経過と体制（遺跡調査番号 930163）

### 1. 概 略

今回の調査対象である大釜向山遺跡は、前記分布調査結果のNo.44・45・46地点の3箇所を含んでいる。前節のとおり、平成5年1・2月に行った確認調査の結果、平安時代の基壇状の遺構が検出されるなどの成果が得られ、これら3地点が同時代の一連の遺跡であり、約1,800m<sup>2</sup>に及ぶ全面調査が必要と判断された。この確認調査の結果をもとに行われた県教育委員会と日本道路公団大阪建設局との協議結果をふまえて、平成5年度に、当該地区的全面調査を実施した。

全面調査は、日本道路公団大阪建設局からの依頼（平成5年11月19日付 大建総管第392号）に基づくものである。調査にあたっては、県教育委員会が、発掘調査については東海アーナス株式会社と、空中写真撮影については株式会社バスコとそれぞれ委託契約を締結して実施した。

調査体制は以下のとおりである。

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 池水義輝

副所長 渡邊 清（事務担当）

三木正則（技術担当）

主任調査専門員 大村敬通

総務課 課長 田中豊英／主任 津守芳輝

企画調整班 調査専門員 池田正男／主任 吉田 昇

調査第3班 調査専門員 輔老拓治

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第3班 技術職員 甲斐昭光・長瀬誠司

臨時の任用職員 岡本一秀

現場事務員 藤田 泉

室内作業員 小笠原知子

### 2. 全面調査の経過

調査に際しては、密集する竹等の樹木を伐採後、人力により遺構面までの掘り下げを行い、遺構面の精査、遺構の掘り下げを実施し、空中写真撮影を含む諸記録の作成を行った。なお、遺物の出土状況については、平板実測によって出土位置を明確にするようとした。

測量にあたっては、日本道路公団打設のB.M. 及び道路センター杭 (STA.189杭及びSTA.189+60杭) を利用した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

- 平成6年1月10日(日) 着工。伐採作業を開始（～14日）。
- 1月14日(金) 調査前の地形測量開始（～18日）。
- 1月21日(金) 掘削作業の開始。
- 1月31日(月) 基壇・平坦面の石列実測開始（～2月2日）。
- 2月14日(月) 調査後の地形測量開始（～15日）。
- 2月16日(水) 全景写真撮影。
- 2月17日(木) 空中写真撮影実施。
- 2月23日(水) 基壇・平坦面・マウンドの盛土除去作業開始（～3月2日）。
- 2月24日(木) 盛土除去中に基壇上面から礎石が検出されたため、写真、実測を行なう。
- 3月2日(水) 調査後の地形測量実施。
- 3月11日(金) 撤収。

#### 第4節 整理作業の経過と体制

遺物の整理にあたっては、発掘調査時に監督員詰所において土器の水洗作業を実施することから開始した。本格的な整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて平成12年度に行い、日本道路公団大阪建設局との契約に基づいて実施した。

土器へのネーミングはそれぞれの遺跡調査番号のあとに通し番号を付した。番号の内容はネーミング台帳に記載している。

接合補強・実測、金属器保存処理を実施した。実測点数は土器22点、石製品1点、金属製品9点である。

土器の復元および写真撮影等を実施し、遺構・遺物の実測図等のトレイス・レイアウト作業を行なった。

整理担当職員 整理普及班 主 任 深江英憲（T.程管理担当）

主 壱 加古千恵子（金属器保存処理担当）

技術職員 関本一秀（金属器保存処理担当）

企画調整班 主 壱 甲斐昭光（整理担当）

調査第3班 主 任 長瀬誠司（整理担当）

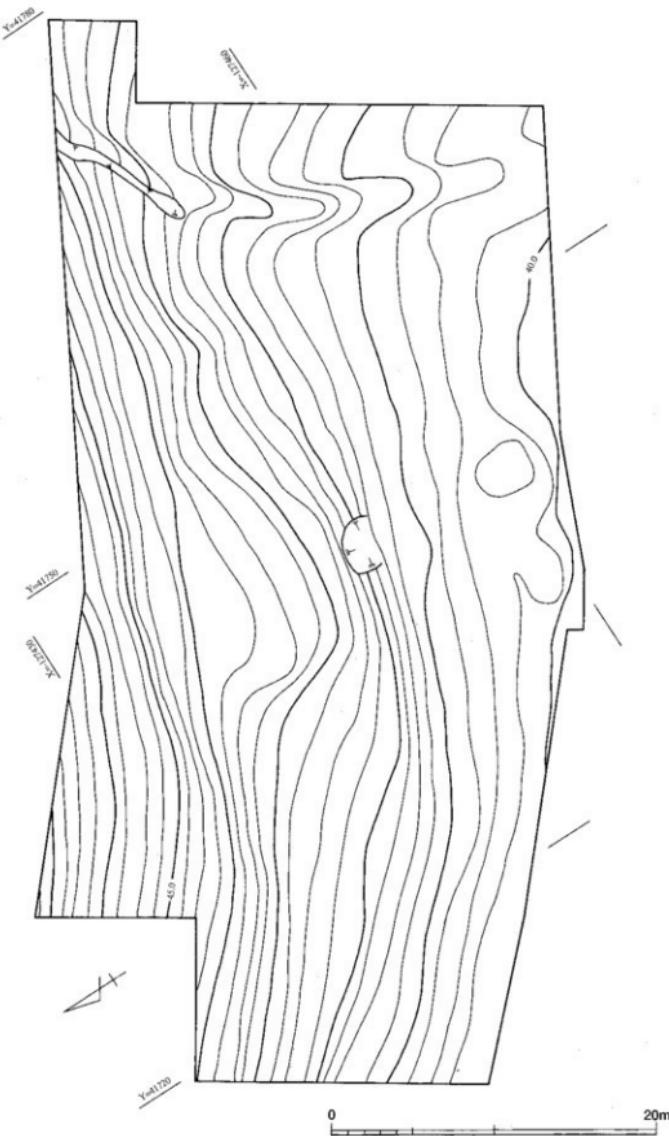
整理技術嘱託員 主任技術員 池田悦子／企画技術員 香川フジ子

図化技術員 木村淑子 前田千栄子 鈴木まき子 今村恵美

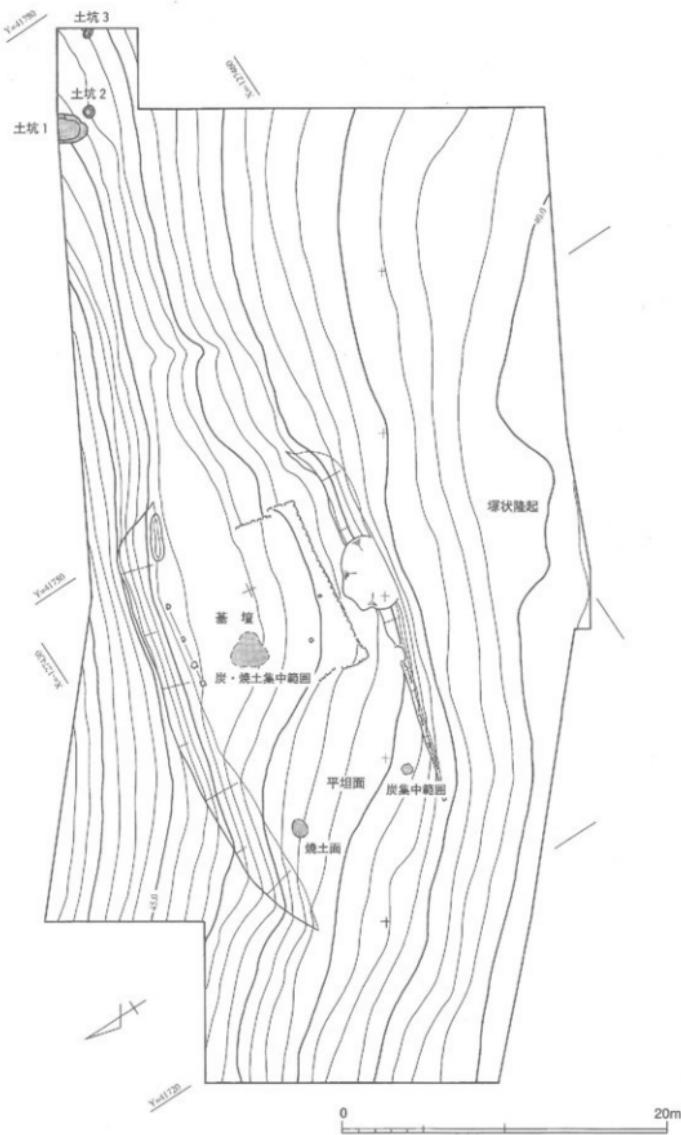
八木富美子 河上智晴

図化補助技術員 早川有紀 藤井光代 岡田祥子

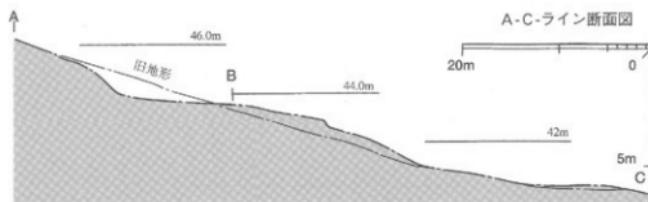
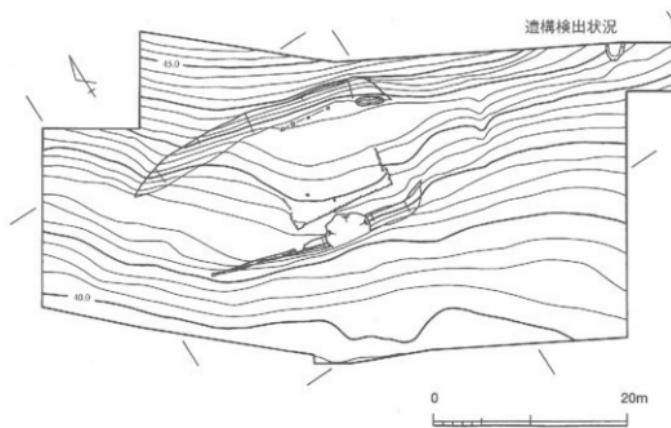
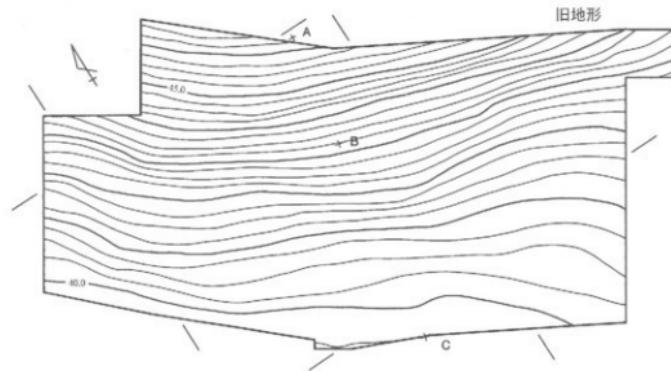
日々雇用職員 三島重美



第6図 調査前の地形



第7図 遺構全体図



第8図 旧地形と基壇塗造の関係

## 第3章 調査の結果

### 第1節 調査の概要

#### 1. 調査区の位置

調査区は、標高40~44mの南向きの山裾に位置する。水田との比高差は少なく、2~6mである。調査範囲は長さ65m、最大幅は30mを測り、その面積は1716m<sup>2</sup>である(図版1・2)。

#### 2. 遺構の名称

確認調査の結果、平安時代の遺物を伴う基壇状の遺構(本報告書では「基壇」と呼ぶ)およびその南側の2箇所の高まり(同「塚状隆起」)が確認されていたが、今回の全面調査の結果、基壇西方に石列を伴う平坦面(同「平坦面」)があることも確認された(第7図)。

以下、これらの遺構ごとに概略を説明する。

### 第2節 遺構

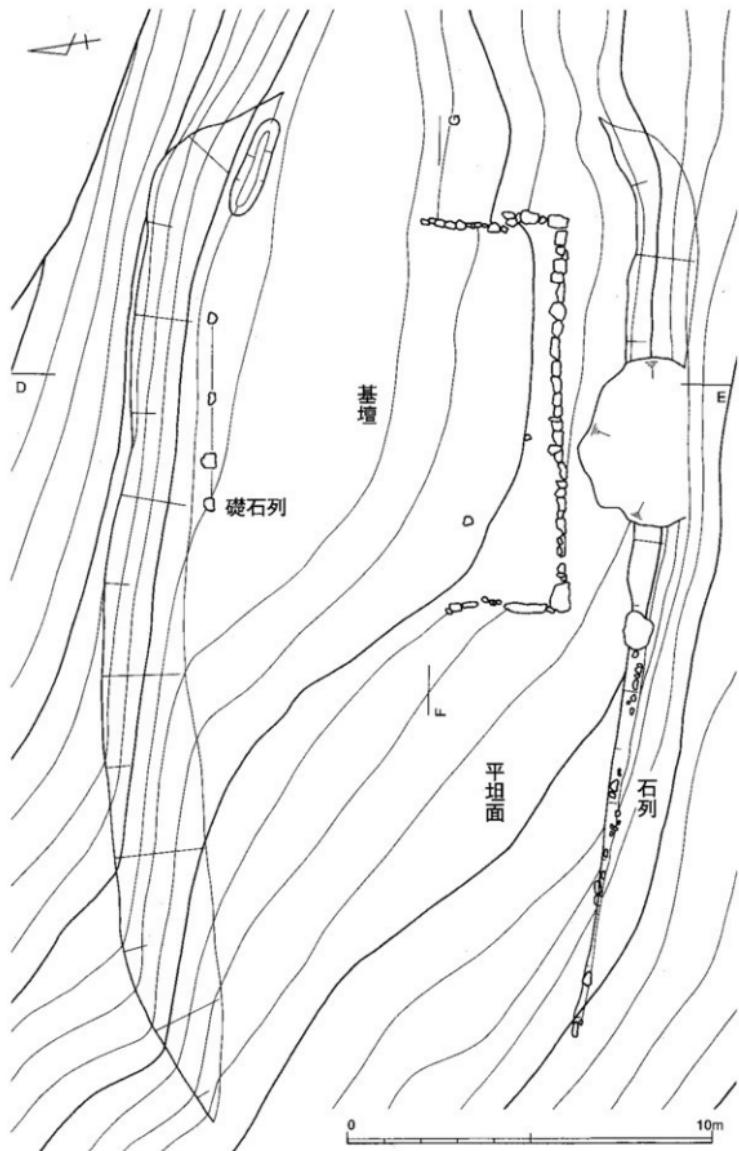
#### 1. 基壇(図版5~7)

位 置 基壇は調査区の中央、標高約43.0mの、南南西を向く山裾に立地する。基壇の南北主軸はN-8°-Eを示し、旧地形の等高線に平行しないことから、自然地形に左右されず、南北方向を意識して構築されたようである(第8図)。

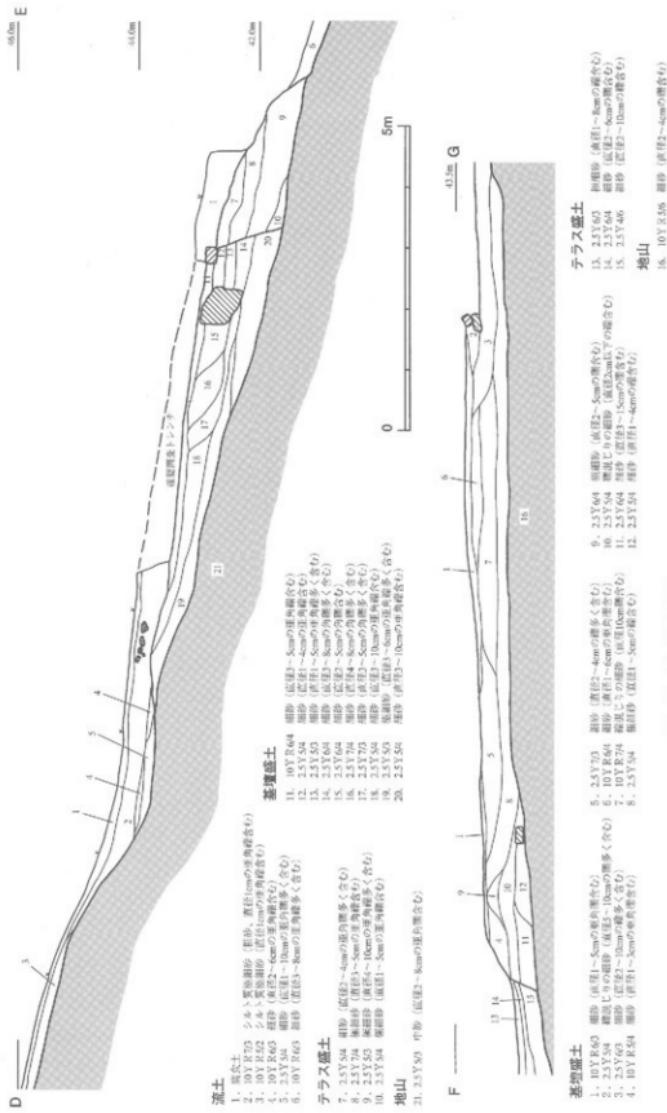
規 模 基壇の平面形は長方形であり、東辺の南半、西辺の南半及び南辺に石列を巡らしている。北辺には斜面と基壇を区切る堀切りや石列などは存在しないが、地山の整形によって明確に区画がなされている。これによれば、基壇の規模は東西約10.8m、南北約10.1mを測る。基壇の高さは、北辺では周辺との比高差がないが、南へ向かうに従ってしだいに高くなり、南辺で20~70cmを測る。ただし、基壇上面における南北両端の比高差が90cm程度認められることから、基壇上面が本来水平であったとすれば、基壇は南辺においては1mを超える高さをもっていたことになる(第9図)。

石 列 東辺及び西辺の北半部には石列が遺存していないかったが、当時の旧地表面の高さを示すと考えられる礎石上面の標高値と比較すれば、この部分に石列があったとしても不自然ではない(第11図)。

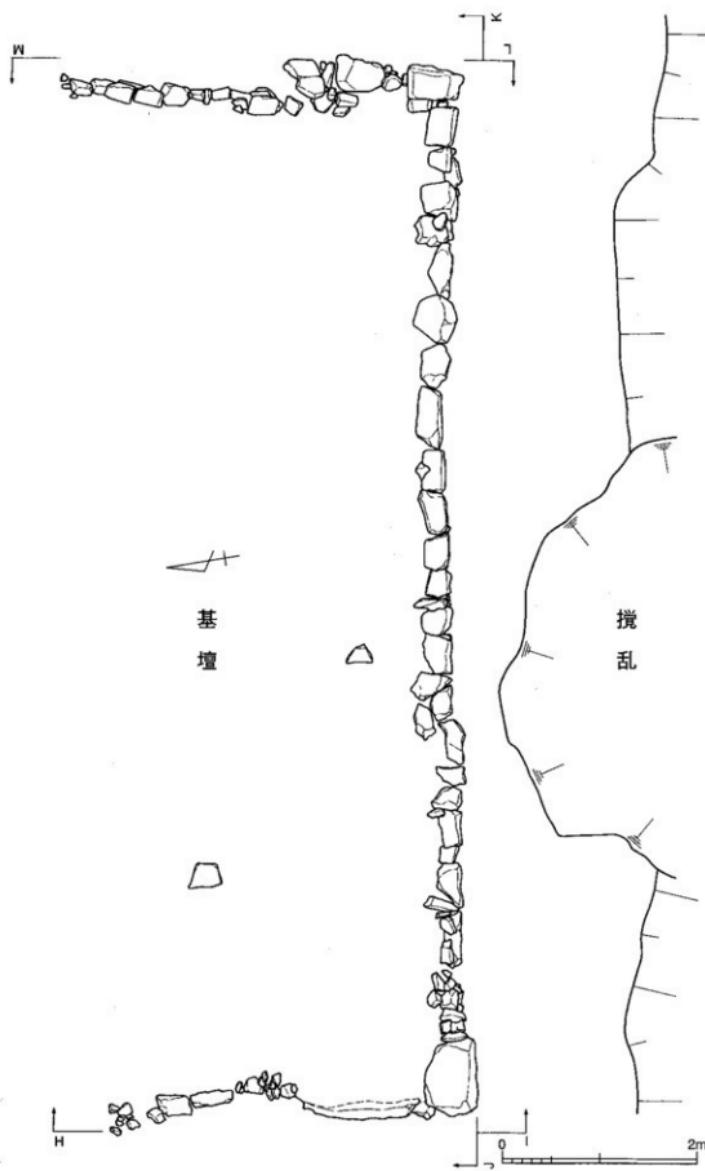
石列には、地山に含まれる角礫を用いている。三辺とも、1~2段の高さしか残存していないが、基壇の周囲には石列と同様の礫が散乱していたため、これらは南辺を中心とした石列の転落したものと考えられる。石列に用いられた礫の総体積はこれら転落石を含めて約3.7m<sup>3</sup>である。平均的な礫の大きさは一辺約40cmである。南東、南西の隅付近に比較的大きな礫を用い、最大のものは南西隅に据えられた0.25m<sup>3</sup>の角礫である。南辺石列直下



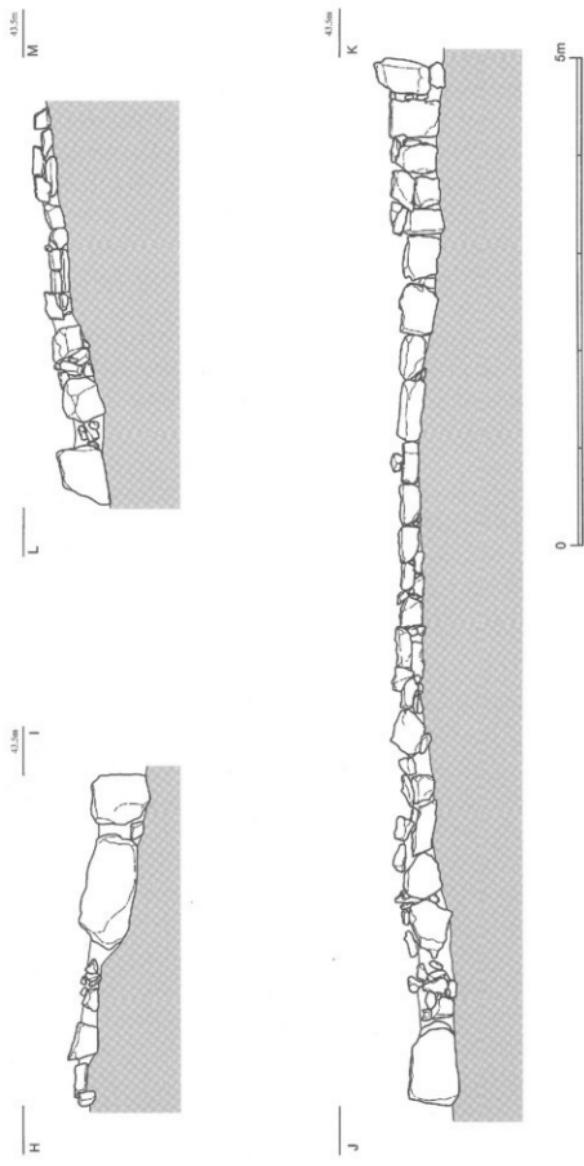
第9図 基壇と平坦面



第10図 土層堆積状況



第11図 基壇石列平面図



第12図 基礎石列立面図

の地山面は中央が高く、東西にやや低い傾斜をもっている。このため、特にこの石列の東端付近では疊を縦長に使用する部分も認められる（第12図）。

**礎 石** 基壇上面即ち石列の内部には、何らかの建築物があったと想定されるが、削平のため礎石列が部分的に確認されるにとどまり、建物の規模等の詳細については明らかにできなかった。この礎石列は、基壇北端に位置するもので、4個の礎石が約5.1m直線的に検出された。礎石の間隔は西から1.20m、1.70m、2.16mと不規則なものである。

このうち、西端のものを除く3個の礎石に接して鉄釘が1点ずつ伴出しており（東から順にM4、2、1）、地鎮などの祭祀行為の痕跡と捉えられる。近辺には鉄釘がさらに3点出土していることから、他の礎石にも鉄釘を添えるという行為が行われたものと考えられる。また、少なくとも釘が伴出する3個の礎石は原位置をとどめている可能性が高いことを示している。

**築 造** 基壇の築造方法は、以下のとおりである。基壇および平坦面の北端にあたる部分で地山を最大60cm掘り下げ、長さ28.5m、幅約2mの平坦面を築いている。掘り下げによって山側の斜面は約30°の角度に整形されている。基壇および平坦面の南半の盛土は地山の亜角礫を多く含むことから、この削平残土を盛り上げることによって構築したことが分かる（第8・10図）。

**石組・焼土** 磂石を覆う約20cmの流土が堆積したのち、基壇北辺近くには斜面上方からの土砂の進入を防ぐための土留めの石組みが直線的に検出されたため、建物の廃棄後もこの平坦面が利用されていたことは想定できる。ただし、この石組みと同一面では、直徑約2.1mの範囲に炭と焼土が集中していた他には、柱穴等の遺構は検出されず、基壇上面の再利用方法を示す痕跡は乏しいといわざるをえない。

## 2. 平坦面（図版4）

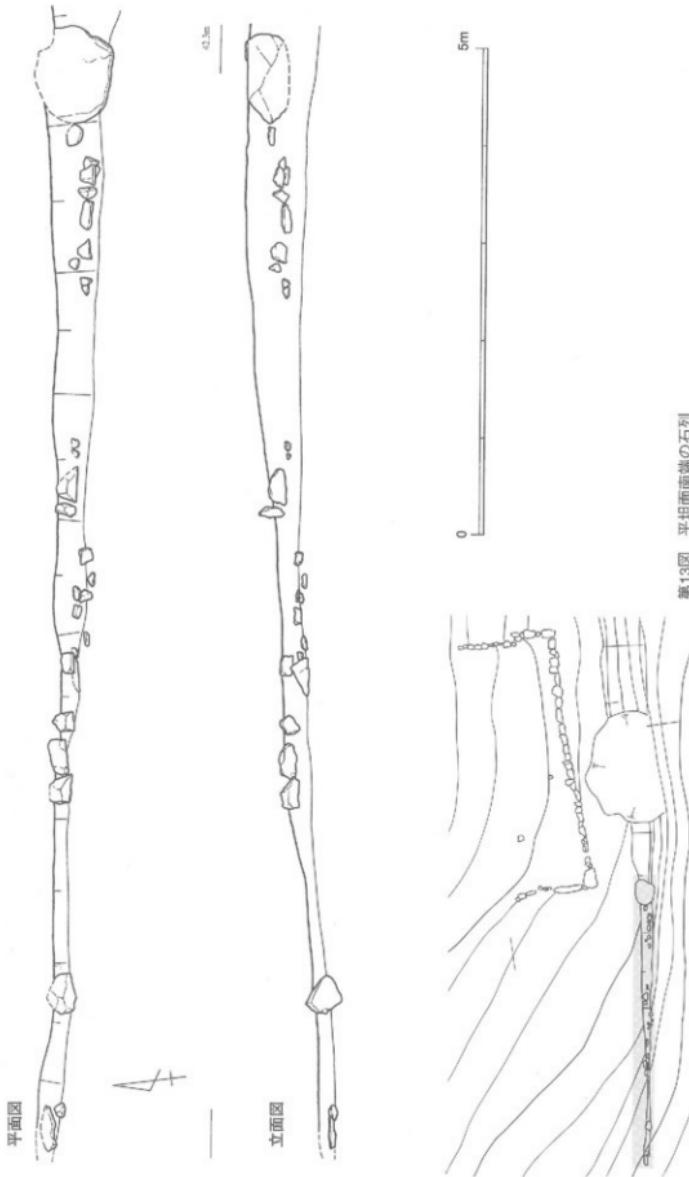
**位 置** 基壇西側には、南西になだらかに低くなる平坦面が造り出されている。この平坦面の西端の状況は明確ではないが、約4mの比高差をもつ山裾と基壇上面を結ぶ形で形成されていたものと考えられる。残存状況の良好な部分では、約6°の傾斜をもって北東方向の基壇に向かって高くなり、これに接続していることが分かった（第9図）。

**規 模** 平坦面は、基壇から西へ向かって約17mが残存しており、幅は西方で10m、基壇付近では13mである。平坦面自体は基壇に接する部分で消滅するのではなく、基壇の石列南辺の南に、幅2mの犬走り状の平坦面となってさらに東へのびている。平坦面東端部については、明確な形で区画されておらず、基壇東方の斜面に収束している。平坦面南辺とその直下の比高差は最大1.5mを測る。

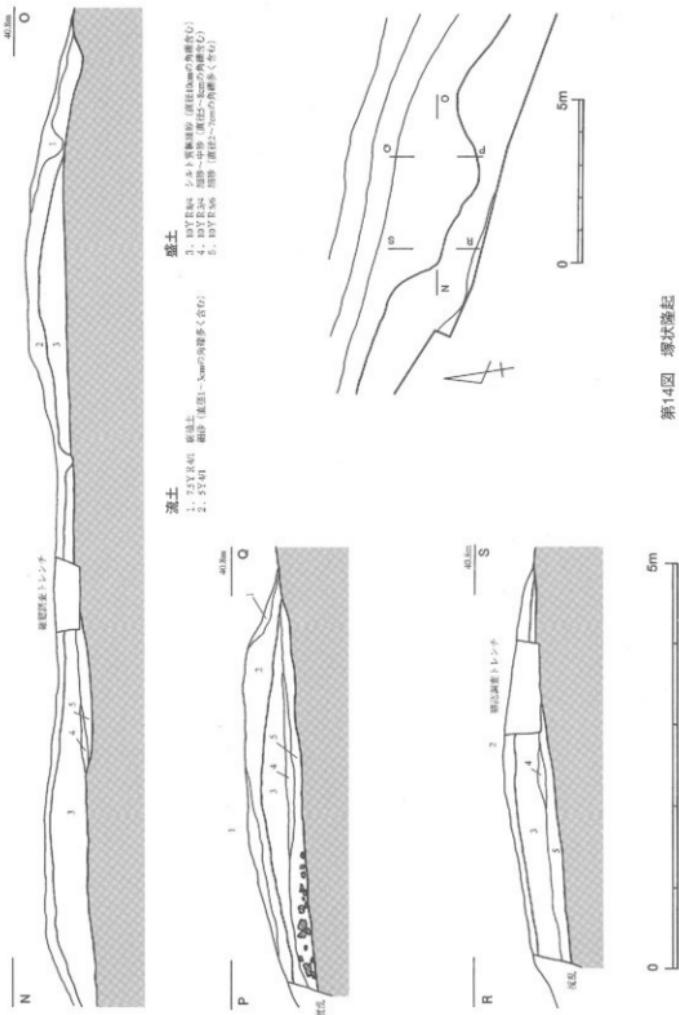
**石 列** 平坦面の南辺には、基壇と同様石列が直線的に配されている。石列は、基壇の南にあたる部分に認められないなど、残存状況が良くないものの、数段を積み上げた部分はなく、基壇に比べて貧弱な感を受ける。ただし、基壇に近い部分には、80cm角程度の巨大な礫を使用している（第13図）。

**遺 構** 平坦面からは、階段状の施設あるいは柱穴や礎石などが確認されず、北半部の地山あるいは盛土上面から炭の集中範囲と焼土上面が各1箇所検出されたのみである。炭は直径

第13図 平坦面南端の石列



第14図 塚状隆起



約50cmの範囲にまとまり、焼土面は楕円形で、長径110cm、短径90cmを測る。

平坦面が傾斜をもつことを考えあわせれば、この平坦面に建物等の営まれた可能性は低いと判断できる。

築 造 平坦面の構築は基壇と同様であり、北側における地山の掘り下げで生じた残土を盛り上げて平坦面南半を形成している。盛土の断ち割り時の観察によれば、平坦面は基壇と同時に築かれたのではなく、基壇構築後に付設されたものであることが分かった。

### 3. 塚状隆起（図版8）

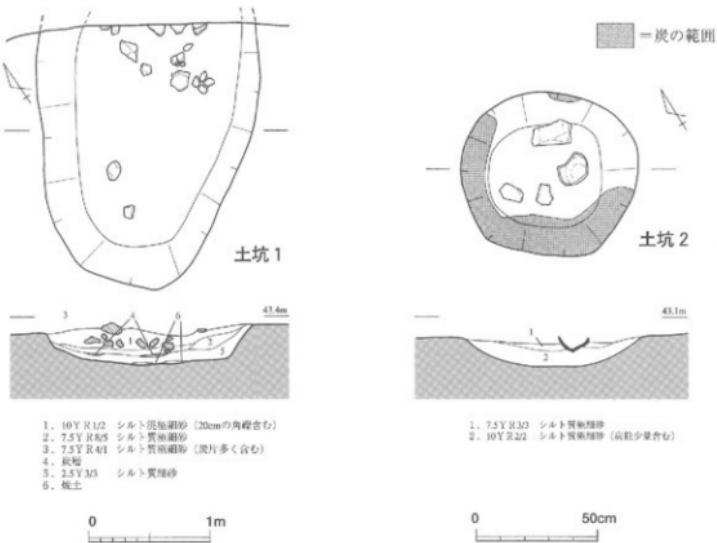
位 置 基壇南側の調査区南端に楕円形の高まりが認められた。確認調査では平安時代の遺物が出土していたため、基壇と同時期の構築物と考えられたが、今回の全面調査において近世の所産であることが判明した（第14図）。

規 模 この塚状隆起は、長軸の長さ約13.0m、短軸の長さ約6.0mの楕円形を呈するもので、高さは約70cmを測る。

築 造 この塚状隆起には、厚さ45cm程度の黄褐色の盛土が、地山および11世紀頃の遺物を含む包含層を覆っている程度であり、大きな地山の整形などは認められなかった。

遺 物 塚状隆起周辺から出土した遺物は少ないものの、盛土より下層で出土した少量の平安時代の遺物を除けば、近世の陶磁器が大半を占める。

集 石 塚状隆起の下層の地山直上には、10~40cm程度の亜角礫が直径2m程度の範囲に集中した遺構が検出されたが、掘り方は存在せず、集石直下にも遺構は確認できなかった。また、



第15図 土坑1・2

礫の配置にも規則性は認められなかった。

#### 4. その他の遺構 (図版9・第15図)

3基の土坑が調査区北東隅で検出された。うち2基(土坑1・2)は面的に広がる炭と角砾を埋土に含む。ともに、埋土に土器を含み、基壇と同じく11世紀頃の所産である。

**土 坑 1** 土坑1は北端が調査区外にあるため完掘できていない。平面形は梢円形であり、残存長2.16m、最大幅1.68m、深さ0.28mを測る。土坑底の一部が焼土化しており、その上層に炭混じりの堆積物が厚さ12cmにわたって認められる。埋土上層には角砾、土器を含む。

**土 坑 2** 土坑2は直径66~72cm、深さ10cmを測る円形の土坑である。埋土下層には炭粒を少量含み、上層には礫と遺物を含んでいる。

### 第3節 遺 物 (図版10・11 第16・17図)

#### 1. 出土状況

出土遺物の大半は土器である。出土土器量は28件入コンテナ(セキスイ T S 28コンテナ)4箱と少ない。種別では須恵器碗や甕、土師器の皿などが大半を占め、煮沸に関する器種の出土は少なかった。これらの遺物は11世紀代のものに限定されるため、この基壇の構築・使用年代を示すものと捉えてよさそうである。

**出 土 位 置** 土器は、基壇およびその周辺から集中して出土したが、基壇上面に限っていえば、北半に集中している。これらの状況が、土器の使用あるいは廃棄の状況を直接示す可能性はあるものの、礎石が残存していたのが基壇北端のみであることを考えれば、本来基壇上面南半にあった土器が、削平の際に基壇周辺に転落したとみるのが妥当である。

基壇周辺の中でも、特に南東の平坦な部分からは比較的多くの遺物が出土したが、これらは基壇上で使用したものか転落したものか、近辺で使用されたものは不明である。後世の削平などによるためか、この周囲でも土坑等の遺構は確認されなかった。

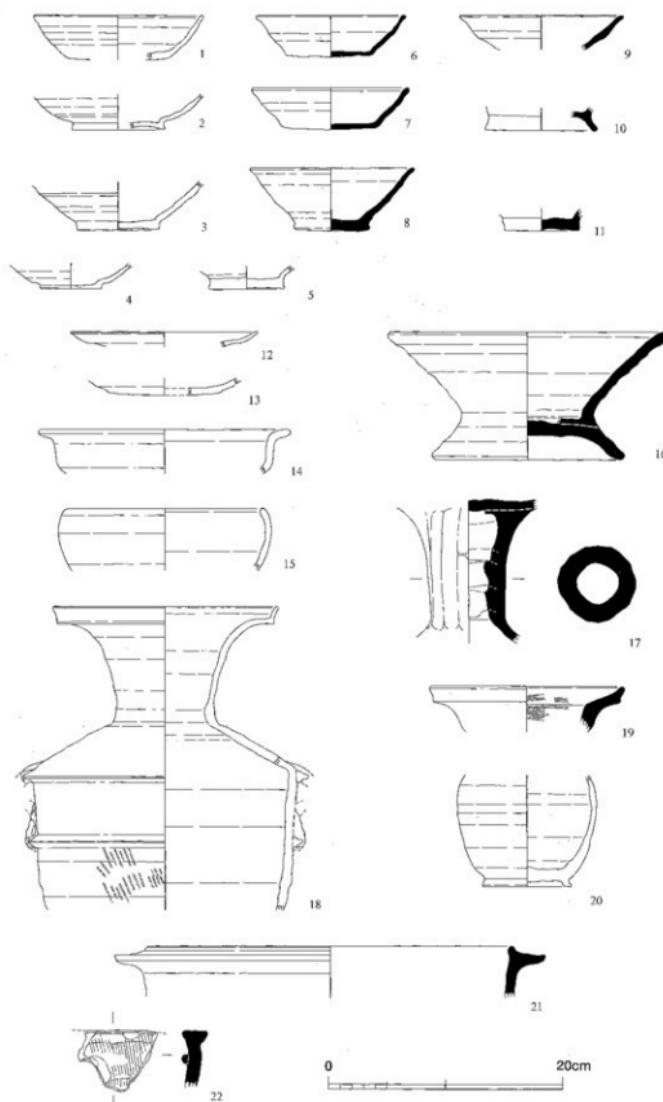
**鉄 製 品** 先述したように、礎石に添えられたと思われる鉄釘6点のほか、盛土内からも、鉄製の鋸先片1点が出土した。この鋸先片が、基壇築造時に混入したものか、意図的に盛土内に埋め込まれたかは明らかにできなかった。

**石 磚** 土坑1・2に近接して弥生時代のものと思われる打製石磚が1点出土した。他に遺物が出土していないため、周辺に当該期の集落は想定できず、狩猟活動の痕跡と思われる。

#### 2. 土 器

**須 恵 器** 杯・碗・皿・壺・甕がある。杯・碗は破片が多いが、底部をカウントすると、10個体以上認められる。張り付け高台が1点ある他はすべて糸切り高台である。甕は実測しない破片であるが、口縁の形状から5、6個体はあったものと推定する。

(1)は杯である。底部はヘラ切りである。碗(2~5)はいずれも見込み部がくぼみ、底部が回転糸切りの高台である。(3)は体部外間に突帯状の縦をもつ。これは志方窯跡群の札馬



第16図 出土土器

地区に特徴的なものである。(12・13)は皿である。(6)は内面に墨が付着し、硯に転用したと思われる。鉢は、体部が丸みをもち、いわゆる鉄鉢と呼ばれるもの<sup>(5)</sup>と、く字に外反する口縁をもつもの<sup>(4)</sup>がある。(8)は双耳壺である。口縁端部が外反しつつ高く立ち上がる。体部には断面三角形の貼り付け突帯が2条巡り、さらにその上に把手を2ヶ所貼り付ける。形態的には播磨東北窯跡群の中に類例がみられる。(4)は土坑2出土の壺である。八字状の高台がつき、体部の形状からいわゆる水瓶と思われる。

**土 砚 器** 杯・椀・高杯・台付鉢・壺・羽釜などが出土した。杯・椀は底部をカウントすると、6個体以上認められ、その大半は糸切り高台である。高杯は脚部が2個体出土し、1個体を実測した。羽釜は破片が2個体出土し、1個体を実測した。

(6・7・9・10)は杯である。このうち、(7・9・10)は石列内から出土したものである。体部は内外面とも回転ナデを行っているが、外面は上下2段のナデにより、不明瞭ながら模をもつ。(10)は貼り付け高台である。椀(8・11)は土坑1から出土した。(8)は底部糸切り、(11)は底部ヘラ切りである。高杯脚部<sup>(4)</sup>は縱方向に削りを行い、断面形態は多角形を呈する。台付鉢<sup>(4)</sup>は土坑1から出土したものである。直線的な体部の鉢部と八字状の高台部を上下に貼り合わせたものである。壺<sup>(9)</sup>は受け口状の口縁である。羽釜<sup>(4)</sup>は断面台形の鋲と短く内傾する口縁をもつ。<sup>(2)</sup>は破片のため全容は不明であるが、外面にハケ目を施し、上部に平坦な面をもつ。また把手を貼り付けたと思われる痕跡がある。移動式の壺の可能性がある。

### 3. 石 器

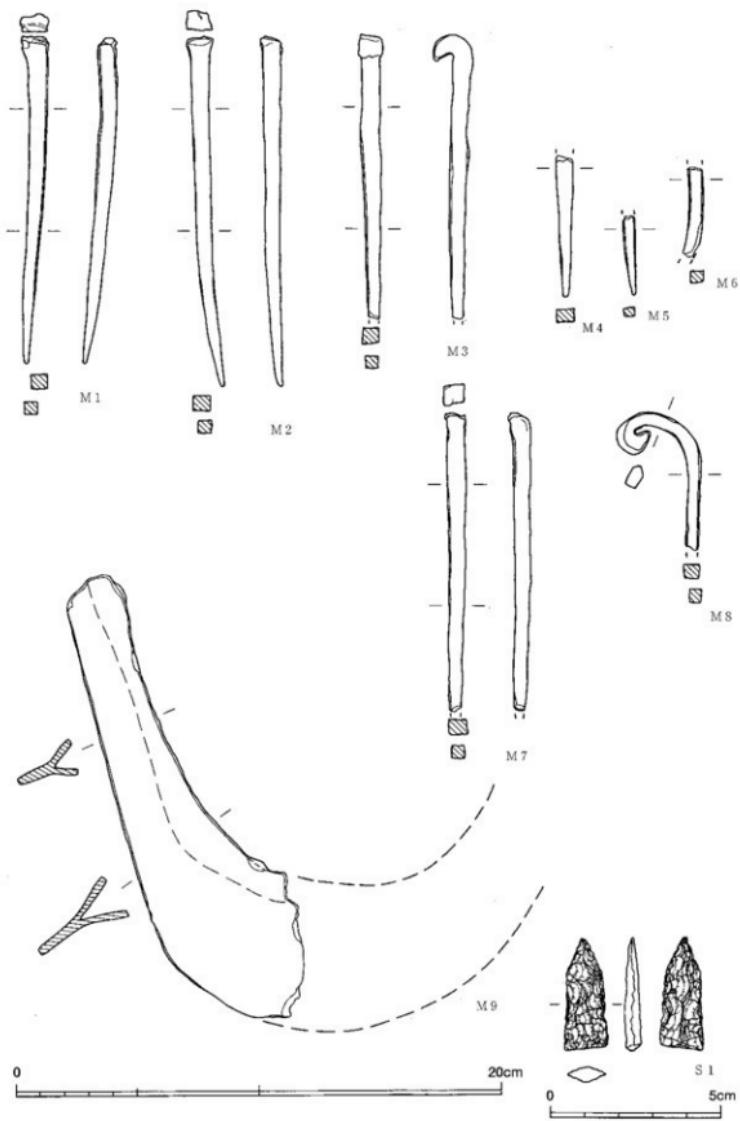
(S 1)はサヌカイト製打製石鏃である。肉眼観察では金山産と推定される。基部を欠損し、全体の形状は不明である。側縁がほぼ平行する。断面形態は菱形である。

### 4. 鉄 器

**釘** (M 8)が盛土内から出土の他は、基壇上面からの出土である。(M 1・2・4)は礎石列に伴い、(M 3)は礎石列の西側、(M 5・6)は南側から出土している。(M 3・5・6)の出土地点は、いずれも礎石列の延長上等距離の位置にあり、亡失した礎石に伴うものとも考えられる。

鉄釘の形態については安田善三郎氏（安田1916）、金箱文夫氏（金箱1984）、大澤正己氏（大澤1979）の頭部の形状による分類に従うと、ほとんどが角釘に分類される。(M 1)は不定形ではあるが、逆台形に成形されている角釘である。頭部から基部まで完存しており、長さは13.5cm（約4寸）を測る。頭部から脚部にかけての断面形は方形である。(M 2)は(M 1)と同じく角釘である。(M 3)は頭部を折り曲げた形状の平折釘で長さ12.7cmを測り、脚部が若干欠損している。(M 4～M 6)は釘の脚部であるが、頭部が残存していないため、分類及び全長は不明である。(M 7)は頭部を方形に成形した角釘である。(M 8)は頭部を叩いて逆台形に成形している角釘である。脚部は欠損している。基部の途中から頭部にかけて曲げられており、別の用途に使用するために故意に曲げられたものと考える。

**鎌** 先 (M 9)は半分弱が残存していた。内側には、木部に差し込むための断面V字型の溝がある。刃先の先端部は、本来はもう少し尖った形状をしていたが、使用しているうちにすり減ってしまったものと考えられる。



第17図 出土鉄器・石器

## 第4章 遺跡の検討

### 第1節 遺 物

大釜向山遺跡から出土した土器は、量的には多くないが、須恵器・土師器が大部分を占める。出土土器の所属年代は11世紀代のものが大部分であり、これが遺跡の年代と考えられる。

器種別では須恵器、土師器とも碗など供膳具の割合が多く、少量の貯蔵具、極少量の煮沸具がある。やや時期の相違はあるが、円教寺薬師堂下層包含層出土の平安時代中期の土器（水口1983）とも傾向が似かよっている。また、須恵器の中には、鉄鉢、水瓶、双耳壺といった仏具を模したもののがみられる。出土土器からみても今回検出した遺構が、寺院などの宗教施設であることが考えられよう。

大釜向山遺跡から出土した須恵器であるが、本遺跡の近隣に志方窯跡群がある。存続時期は本遺跡と重複し、距離は約4kmである。実際本遺跡からは志方窯跡群の札馬地区で生産されたものと似た特徴の碗が出土している。ところが、双耳壺については志方窯跡群の中でも生産されているが、本遺跡から出土したものは東播北部窯跡群のものに似る。東播北部窯跡群は、加古川中流域にあり、本遺跡とは直線距離で約22km離れている。しかし本遺跡とは丹波道では直線的に結ばれている。東播北部窯跡群の製品は主に加古川を介して流通していたが、本遺跡でみられることから、流通に丹波道も関連していたと考えられる。

### 第2節 遺 構

#### 1. 検出遺構の種類と時期

検出された遺構は、礎石建物を伴う基壇、平坦面、土坑、焼土面、塚状隆起等である。このうち、基壇、これに接続する平坦面、土坑1・2は11世紀のもので、大まかには同一時期に使用されたようである。この他、塚状隆起については、その直下の集石が11世紀に営まれた可能性があるが、塚状隆起は近世墳の所産である。また、基壇上で検出された炭・焼土は、礎石建物の埋没後に形成されたものである。平坦面上の焼土面等は時期不明であるが、層位的には建物等と同一時期の可能性が高い。

#### 2. 基壇・平坦面の特徴

立 地 検出された11世紀の遺構は、礎石建物の基壇と、それに接続する平坦面、土坑2基などである。これらは、山裾から斜面にかけて位置するが、その周囲に一般集落が立地していた痕跡はない。また、当遺跡の東方で行った確認調査でも、集落遺跡あるいは寺院付属施設等の存在を想わせるような結果は得られなかった。また、調査区西方は急斜面で、遺跡の立地する可能性は低い。

当地の中世における集落の位置などの具体相は明らかではないものの、以上のことから、基壇をもつ建物は集落と隔絶した位置にあると思われる。また、密集した寺院諸施設の一部を構成する堂宇とも考えられない。

**礎石建物** 11世紀の礎石建物は、一般の住居や倉庫とは考えがたいものである。建物の規模については、礎石の残存状況が良くないため、当遺跡の基壇とほぼ同規模の、播磨・円満寺東の谷遺跡「北基壇」例を参考にしたい。ここには、14世紀後半～16世紀前半にかけて、三間四方の瓦葺き礎石建物が營まれており、当遺跡の建物規模を三間四方と考えておく。また、瓦片の出土をみないことから、屋根については草葺きあるいは板葺きを想定できる。

**平坦面** 基壇西端と山裾を結ぶ形で平坦面が造成されている。盛土の切り合い関係からみた構築の順序としては、地山の掘り下げ、基壇の築造、平坦面の完成の順であるが、基壇築造時に平坦面の一部が資材の搬入や人員の通行に利用された可能性は高いものの、調査ではこの痕跡を検出することはできなかった。いずれにしろ、基壇と平坦面は有機的に関連しあうものであり、平坦面は、基壇上の建物への通路あるいは広場的な性格をもった空間と捉えることができよう。

当遺跡における建物は基壇上で検出された1棟のみであり、平坦面をはじめその他においても検出されておらず、これが本来の姿だったと思われる。

### 3. 基壇・平坦面の性格について

調査区付近は、地元で「しょうねんば（正念場か？）」と呼ばれていた。この名称が近世頃の塚状隆起を指したものか、11世紀の基壇・平坦面のことを語り伝えたものかは不明であり、さらにその言葉の意味するところも容易には計り知れない。ただ、「正念」が、「心から仏を信じ、一心に念佛すること」（新村編 1998）と、仏教に関わる言葉であることや、この基壇の南側に、巡礼道として利用されていた古道が存在したという伝承も念頭に置きながら、この遺跡、特に基壇をもつ礎石建物の性格を中心に検討する。なお、伝承に残る古道は調査で検出されなかったものの、調査区に南接する現在の水路設置工事で消滅した可能性を考えておく。

**一乗寺** 当遺跡より約3km東方には、加西市坂本町所在の名刹、法華山一乗寺がある。印南・賀茂両郡界に位置する幽寂な天台寺院であり、加古川市や姫路市方面に向かう交通の要地にあたっていることもあって、多くの参詣者を集めている。

一乗寺に関する史料は少なく、文献上の初見は、応保元（1161）年に記された「覺忠三十三所巡礼記」である。開基を明らかにする史料はないものの、承安元（1171）年に三重塔が建立されるなど、この頃には大いに寺觀を整えていたといわれる。さらに、「峰相記」によれば、12世紀の中・後期には、国衙の主催する国家鎮護的色彩の強い法会も行うような地位を確立していたといわれている。

**巡礼** 摂關末期から院政期の記録や往生伝には、聖が修驗的靈場をめぐって難行苦行する「巡礼」説話がみえる。この巡礼が西國三十三所巡礼へと発展するといわれているが、その後15世紀中頃には、三十三所巡礼の修驗道的な性格が変質し、巡礼への民衆参加や西國三十三所順路の変化などが起き、近世には西國巡礼における勧進型集団の衰退とともに、一般

民衆が強力で巡礼を行うようになり現在に至っている。西国三十三所巡礼は、衆生を清度する觀世音菩薩の化身数33にちなみ、33箇所の札所とよばれる寺院をめぐる巡礼である。近畿地方を一巡し、道程は約970kmに達する。札所間には巡礼者が徒歩で通行した巡礼路が通じ、道標等が設けられている例が少なくない。

**巡礼道** 一乗寺は、この西国三十三所觀音巡礼の第二十六番札所であるが、西方約20kmの姫路市書写には、「西の比叡山」と呼ばれた書写山円教寺が第二十七番札所として存在し、この両者を結ぶ近世の巡礼道も知られている。これについては、いくつかの史料のなかから足利氏が引用されている寛政3（1791）年版の『西國順禮細見記』に示されたルートを確認しておく（足利 1991）。それによれば、書写山—よこせき村—中島村—庄村—かすが野—しがはなー大がま村—法花山とあり、現地名とのおおまかな対比が可能である。これによれば、山越えを避けた両地点の最短ルートを指向すること、そしてこの近世巡礼道が当遺跡の位置する大釜村を通ることを確認しうる。

大釜村内における巡礼道の具体的な位置を示す地図、史料が残されていないものの、地元では、先に触れたように、当遺跡で検出された基壇の南側に、巡礼道として利用されていた古道が存在したというから、大釜村を通ると記載された巡礼道がこれにあたる可能性が高いと考えるのが自然であろう。これを否定するような道標等も現在、知られていない。

**遺跡の性格** 以上のように、集落や寺院とは隔絶した山地の斜面に、通路あるいは広場である平坦面を伴った三面四方の礎石建物ただ1棟が基壇の上に築かれていたことが判明した。

地元に残る伝承－遺跡に南接する巡礼道の存在と、「正念場」という呼称は巡礼の盛行する15世紀中頃以降あるいは近世以降の歴史的事実を反映するにすぎないのかもしれない。しかしながら、これを遡る11世紀におけるこの礎石建物を、考古学的な立場から、何らかの宗教施設と評価するのに異論はないであろう。一乗寺周辺の堂宇に関する文献資料が残っておらず、11世紀段階におけるこの宗教施設を巡礼道に結びつける根拠もないのだが、一乗寺に近接し、円教寺との最短ルート上に位置する（第2・18図）ことから、巡礼者である聖たちが利用した宗教施設とここでは考えておきたい。

#### 参考文献

- 新村 出編 1998『広辞苑 第五版』岩波書店
- 大澤正己 1979「西日本を中心とした鉄釘の研究 花尾城址出土釘の科学的調査よりの発展」『郷土八幡』八幡郷土史会
- 金箱文夫 1984「近世の釘—川口市赤山陣屋跡の事例を中心に」『物質文化43』物質文化研究会
- 小林基伸 1984「法華山一乗寺の歴史と文化」「はりまの名刹—法華山一乗寺の秘宝」兵庫県立歴史博物館
- 足利健亮 1991「歴史地理学からみた巡礼道」「歴史の道調査報告第1集 西国三十三所巡礼道」兵庫県教育委員会
- 菌山香穂ほか 1974「王朝時代の文化」『兵庫県史』第一巻 兵庫県
- 速水 侑 1996『觀音・地蔵・不動』講談社現代新書
- 水口富夫 1983「薬師堂出土遺物について」「特別展—1000年の歴史を秘める—書写山円教寺」兵庫県立歴史博物館
- 安田善三郎 1915『釘』

# 写真図版



上空から見た遠跡  
北西から  
一乗寺は中央の谷  
を抜けて左方向



遠 景  
南西から  
雄鷹川岸から調査区を  
望む

図版2 遺跡の全景(1)



上空から見た遺跡  
上方が西

図版3 遺跡の全景(2)



図版4 遺跡の全景(3)

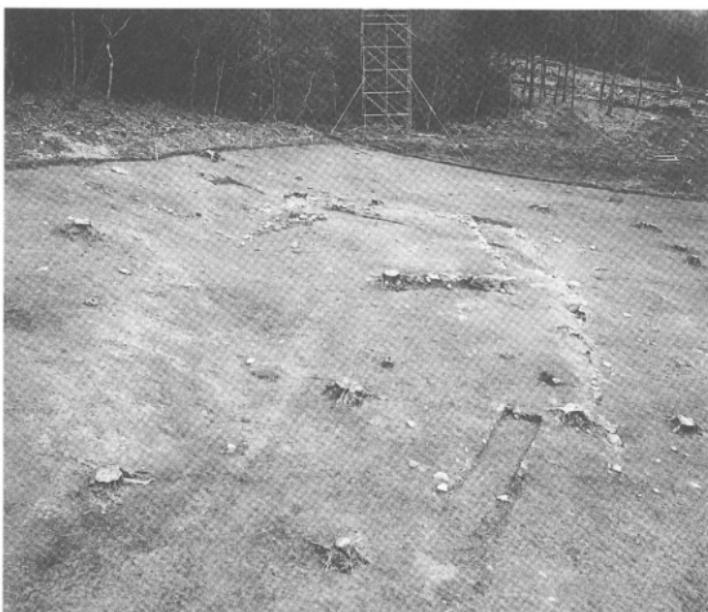


基壙・平面の全景(2)

東から

礎石検出前の状況

遠景は大塚新の集落

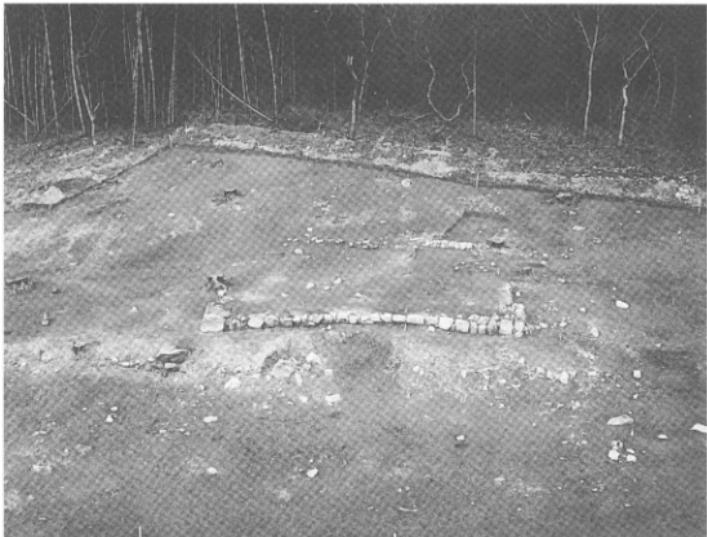


基壙・平坦図の全景(3)

西から

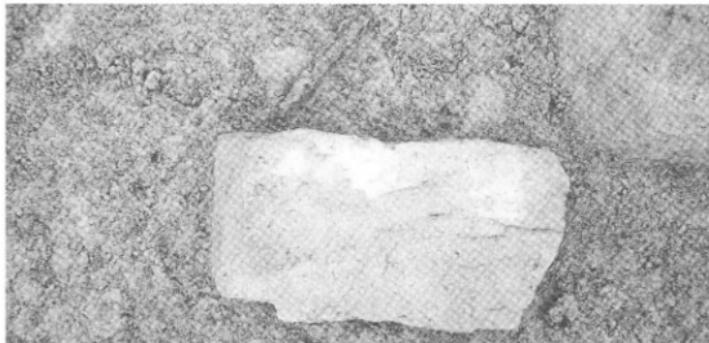
礎石検出前の状況

遠景は種認溝塗区





磁石検出状況  
東から  
土手の上面で石組み  
を検出



磁石と鉄釘検出状況  
南から  
西端から3列目



左：磁石と鉄釘検出状況  
南から  
西端から3列目  
右：左写真の近景  
南から



基壇への盛土  
南から  
中央東南断面の東半



基壇への盛土  
南から  
中央東南断面の西半



基壇・平坦面への盛土  
西から  
中央南北断面

図版8 塚状隆起



塚状隆起全景  
北から



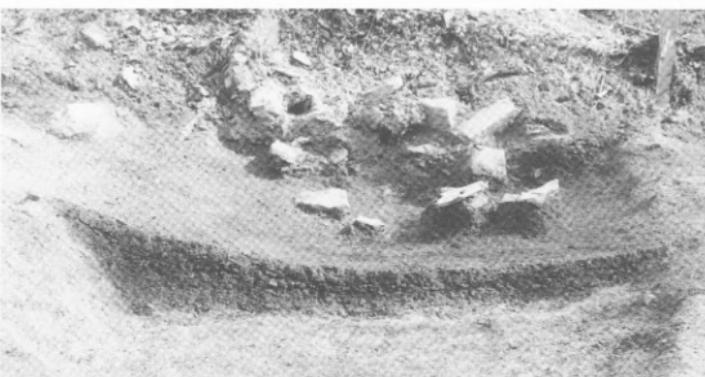
塚状隆起  
盛土下層の集石  
南東から



土坑1・2全景

南から

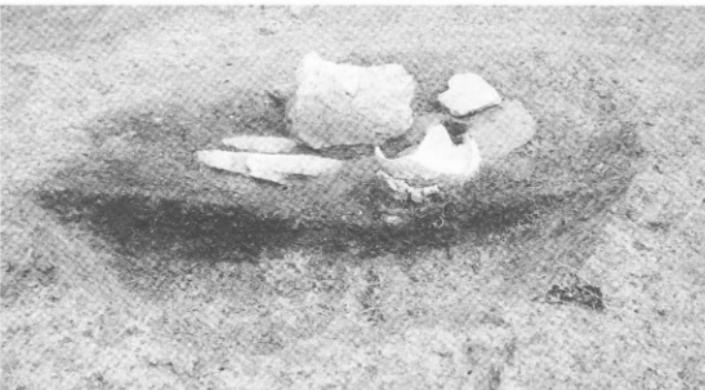
炭層上面の状況



土坑1 土層断面

南から

炭層以下の状況

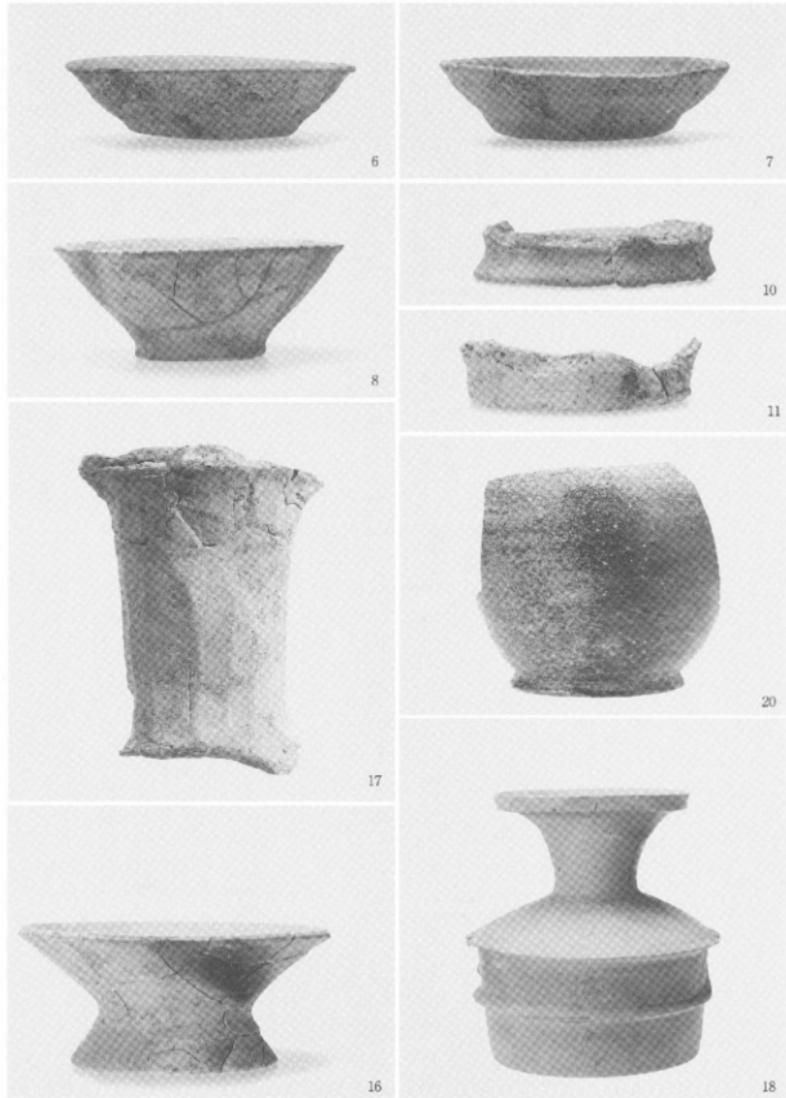


土坑2 土層断面

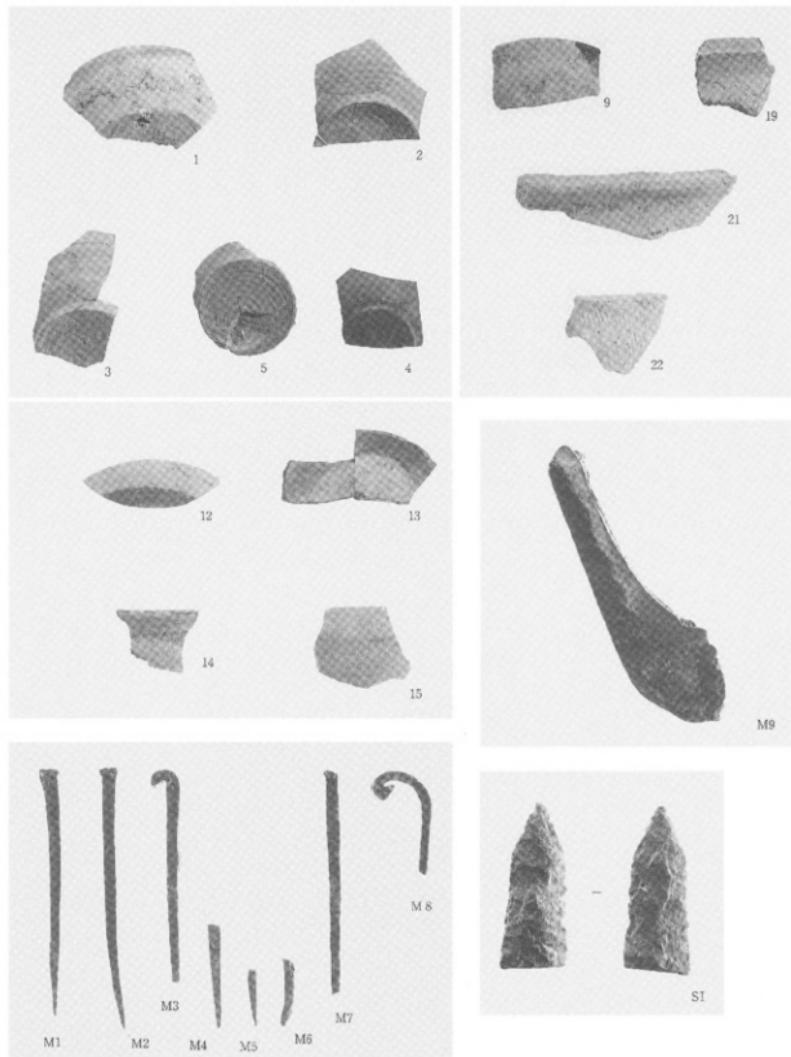
南から

炭層以下の状況

図版10 遺物



出土土器



出土土器・鉄器・石器

## 報告書抄録

ふりがな	おおがまむかいやまいせき							
書名	大釜向山遺跡							
副書名	山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XXXII							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第208番							
編著者名	甲斐昭光・長濱誠司・岡本一秀・仁尾一人							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号							
発行年月日	西暦2001(平成13)年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
大釜向山遺跡	兵庫県 姫路市 鈴東町 大釜新 字龟甲山	28201	920313 (確認調査)	34度 51分	134度 47分	1993.01.12 ~01.13	160m <sup>2</sup>	山陽自動車道建設事業に伴う調査
			920314 (確認調査)	01秒	24秒	1994.01.10 ~03.11	15m <sup>2</sup>	
			930163 (全面調査)				1,716m <sup>2</sup>	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大釜向山遺跡	宗教施設	平安時代 弥生時代	基壇を伴う礎石 建物、土坑	須恵器・土師器・ 鉄器 石鎧		巡礼に関わる施設か		

兵庫県文化財調査報告 第208冊

姫路市

おおがまむかいやま  
**大釜向山遺跡**

山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 X X II

平成13年2月発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078(531)7011

発 行 兵庫県教育委員会

〒652-0032 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

TEL 078(341)7711

印 刷 交友印刷株式会社

〒650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4-5

TEL 078(303)0088